

第108号
 【発行所】 いぬい紳一郎事務所
 【連絡先】 7157-6140

流山平和・南
 後援会ニュース

日本共産党

南の風

命を守る政治に転換を！

「自宅療養」の方針を撤回し 至急事態打開の対策を！

多くの国民の反対の声を押し切って強行された五輪。その結果はごつごつたでしようか。

全国のほとんどの都道府県でステージ4へ

みなさんご存知の通り、五輪開催前から感染は増えだし、4度目の緊急事態宣言発出へ。開催中に東京の感染者は一日5000人を超え、8月10日現在31都道府県で最も深刻なステージ4へ。国内感染者は一日で2万人をこえるありさま(8月13日)です。

これは「重大な人災」だ！

11日の厚労省コロナ対策専門家会議は、感染爆発を「災害時の状況に近い」「危機感を行政と市民が共有して対応」をと。12日の東京都モニタリング会議は、感染拡大は「制御不能」「災害時と同様に、自分の身は自分で守る」と主張。

しかし「災害」とはいえ自然災害ではありません。緊急事態宣言下で五輪開催を強行し、政府自らが日本中をお祭り気分巻き込んで「危機感の共有」を壊し、

人流抑制に失敗して感染爆

発を招いた「重大な人災」ではないでしょうか。

「制御不能」「自分の身は自分で」というだけなら、

なんのために政治と行政はあるのでしょうか。今こそ政府や都は五輪開催強行の誤りを認め、パラリンピックの中止を決断し、矛盾したメッセージを打ち消して国民に明確な危機を発信し、対策を示して実行することが必要です。

命を守る対策を

国は「自宅療養」方針を撤回し、広いフロアに多数のベッドを配置した臨時施設の整備などを至急おこなうべきです。感染拡大をおさえるためには有症状者だけでなく大規模にPCR検査を実施し、感染者の保護が必要です。休業・営業短縮には十分な補償を。ワクチンは確実適切な供給を。医療機関への支援を。ただちに国会を開いて議論を。

流山でも市に要請

日本共産党流山市議団も7月30日市長あてコロナ対策の16回目の要請を行い、大規模検査や療養施設の市内設置などを求めました。

総選挙で政権交代を

命守る政治へ！ 野党の総力で政権交代を！
 あなたの力をお貸しください。

千葉のほ
 さいとう和子
 比例は日本共産党へ



核兵器禁止条約に日本政府も参加を



市議会議員
 いぬい 紳一郎

史上初めて核兵器を違法化した核兵器禁止条約が成立してから4年がたちました。

アメリカによる広島・長崎への原爆投下から76年目の原爆記念式典では、広島・長崎の両市長が、核兵器禁止条約を唯一の原爆被爆国・日本政府が締結・参加するよう求めました。

アメリカと中国、ロシアなどの核大国が対立し、緊張を高めれば、偶発的であっても核兵器による衝突を引き起こしかねません。核兵器が使われれば破滅的な結末になる！このことに危機感を強めた非核保有国と、被爆者をはじめとする市民社会が共同で生み出したのが核兵器禁止条約です。今年には核兵器禁止条約が発効した歴史的な年です。

1面続き

昨年12月議会で核兵器禁止条約について私が質問。井崎市長から「平和都市宣言を行っている流山市の長として、条約が発効されたことに歓迎の意を表します」とうれしい答弁がありました。

いっぽう、先の6月議会に、市民(新日本婦人の会流山支部)から「核兵器禁止条約の参加・調印・批准を国に求める意見書提出を求める請願書」が提出されましたが、流政会、公明、自民が反対し、16対11で不採択となっています。



流山市役所入口の平和の像

と宣言しています。国内の世論調査でも6〜7割が条約参加を支持し、政府に署名を求める意見書も全自治体の3割以上

流山市は、市制施行20周年の昭和62年1月1日に、「私たちは、日本国憲法の平和精神にのっとり、武力による紛争をなくし非核三原則をまもり、すべての核兵器をすてることを訴え、世界平和確立のため、ここに平和都市を宣言する。」

劇場の灯を消さないで

フェイスシールドも併せてして舞台を鑑賞していただきなうなっていました。

『劇場という日常から隔絶された空間で自由に心を解き放つて遊んでいたとき、その素晴らしいひとときを、

これからの豊かな人生を紡ぐ糧としていただけますことを願い、活動を続けてまいりました。』(加藤健一事務所のお手紙より) 加藤

ティータイム



「スクリーンから飛沫は飛びません。」吉永小百合の映画の舞台あいさつでの言葉です。

昨年から、演劇や映画等の芸術関係の方々は非常に苦労されていらっしゃると思います。一番前の座席の方は、マスクはもちろんですが、

日本共産党は、かつての日本の侵略戦争に反対をした唯一の政党であり、反戦平和は私たちの原点です。党綱領に「核兵器廃絶」を掲げる党として、被爆者をはじめとする国内外の反核平和運動に連帯して力をつ

父と私と日本共産党

加3丁目 久保智代恵

1962年4月、看護師を旨とし長野県穂高町から東京に出発する日、父は「自由に生きろ、赤にはなるな」と私を送り出した。

70年ベトナム戦争反対、沖縄返還闘争を経て、私は日本共産党に入党。それを知った父は何も言わなかった。

80年代社公合意後、社会保障は後退。正月不破委員長の挨拶を視聴していると、自民党支持の兄が「共産党は委員長をずっと変えない一枚岩だ」というと父がすかさず「それだけましめだつてことだらう」

97年11月52年間生活した自宅を全焼、子供の軒下で暮らせない自主独立を誇っていた父が私と同居すること

ねんても相談

随時受け付け
090-8086-3281
(いぬい)



絵手紙 加Mさん

編集後記

●一年半もあったのに！菅首相の会見をみるたびに怒りがこみあげます。コロナ禍で政府から国民全体に支給されたものは「アベノマスク」と10万円の給付金だけ。大規模検査と隔離で感染拡大を防ぐ、という感染症対策のイロハは無視され続け、唯一頼みのワクチンは供給が混乱。国民はほぼマスク・手洗いの自助だけでここまで頑張ってきたのです。●GOTOキャンペーンで人の流れを促進しながら、同じ口で人流抑制を呼びかける。ついには国民大多数の反対をよそに五輪に突入、感染爆発をまねいても反省無くパラリンピック開催？●「自宅療養」でもう命が危なくなっています。総選挙ではこんな政権引きずり下ろしましょう！(e)